

文化財センター通信
【かざぐるま】

風車

4

平成14年4月1日発行

〒640-8268 和歌山県和歌山市広道20番地

発行：財団法人 和歌山県文化財センター

Tel：073(433)3843 Fax：073(425)4595



■ 高田土居城跡溶解炉転用井戸の断面

主な内容
高田土居城跡出土の溶解炉（炉体） 転用井戸について
コラム・考古学の散歩道
- 日本における土器の移り変わり (センター速報展展示解説から)
旧中筋家住宅の修理工事
お知らせのご案内
- 文化財センターの新体制
スタート!



■ 溶解炉転用井戸中段部の羽口差し込み穴

高田土居城跡出土の溶解炉（炉体）転用井戸について

佐伯 和也

当センターは平成9年度から県教育委員会文化財課の指導のもとに、南部町と南部川村で建設が予定されている「近畿自動車道紀勢線南部インターチェンジ（仮称）」に先がけ、徳蔵地区遺跡の発掘調査を行ってまいりました。高田土居城跡はこの徳蔵地区遺跡の範囲内に位置し、中世

後期の城郭の規模としては全国屈指のものです。

溶解炉を井戸枠に転用した井戸は調査区の北端で検出しました。詳細には高田土居城跡の土塁が築かれていたと推定される、北外郭部の東西方向の堀に隣接した地点、つまり北外郭部敷地内の北端中央部で検出しました。従って、時期的には高田土居城の廃絶後と考えられます。また、ここから出土した土器は上層の埋め土から瀬戸美濃天目茶碗の破片がただ1点のみで、井戸廃棄の時期決定には物的実証力として弱いですが、この破片を信用するならば江戸時代前期の時期が考えられます。従って、現在考えている高田土居城廃絶の時期である16世紀後半から17世紀後半の範疇でこの井戸の構築時期をとらえることができます。

【井戸の形状と構造】

井戸の掘り形の平面形は直径約1.8mの円形です。残存の深さは約2.5mです。

井筒は溶解炉の炉体を三段に積み上げ、この中でも最上部は二重に重ねていました。一個体の炉体の規模は直径80～85cmの円筒状のもので、やや中膨らみです。厚みは4～6cmを測るが、この内0.5～1cm分は珪素が高熱により噴き出し、ガラス質となって付着しています。最下段の炉体はほとんど朽ちてはいるが上部と下部に竹製のタガで補強していました。また、底には厚み2cm、横80cm、縦35cmの板材を四角に組み合わせ、その頂点毎に長さ40～60cm、直径3～5cmの棒状のものを斜めに渡し、その上に三段炉体を設置しています。なお、この炉体間の接合は粘土で充填し、水漏れを防いでいたと考えられます。

【溶解炉の構造と仕組み】

本来の溶解炉の構造は炉体が三段からなり、上部から上甌、火甌、炉鉢と呼ばれるものです。燃料や銑鉄は上甌から投入し、火甌に落下してきた銑鉄はここで溶解され炉鉢に溜まります。炉鉢にはあらかじめ小さな穴を穿ち、粘土で充填しておきます。次に銑出時にこの穴から取り出す仕組みのものです。

送風施設はこれくらいの大きなものとなれば踏鞴（ふみふいご）が考えられます。今回出土した炉体の一つ（井戸の中段部分）には、鞴から通じ炉体と接合する部分いわゆる羽口の差し込み穴が確認できました。この穴の直径は約20cmで、羽口は厚みを差し引いても内径10cm以上はあると考えられ、大量の風を必要としたと思われます。

【挿絵からの読取り】

挿絵は幕末頃の作業場の風景です。大きな土壁で左右を仕切り、右側は送風の作業の様子を、左側は溶解炉本体を据えて銑込みの様子をあらわしています。土壁で仕切るのは作業時に鞴を作動させる人たちに火気が及ばないようにしています。送風装置は踏鞴を使用しています。この鞴は長方形で周りを石積みし、その上に練った土を貼って固めたものです。次にこの上にシーソー状にした踏板を設置します。挿絵ではこの上にフンドシ姿の男衆が天井の梁から吊るした手綱を支えにして鞴の板を交互に踏んでいます。こうして起こされた風は、土壁の向うに据付けられた溶解炉本体の中段部分に接続され、ここで燃焼します。中央には片膝をついて鞴からの送風の調子を観ている人がいます。その左には銑鉄あるいは燃料である木炭を投入する人の姿があります。また、この人の投入の格好から大体の溶解炉の大きさを推し測ることができ、ここでの溶解炉の

炉の大きさは大体2m前後であろうと推測できます。なお、鑄込みの作業場の二人はさすがに火の粉を頭にかぶらない様に編み笠状のものをかぶり、衣類を身に付けています。

【結び】

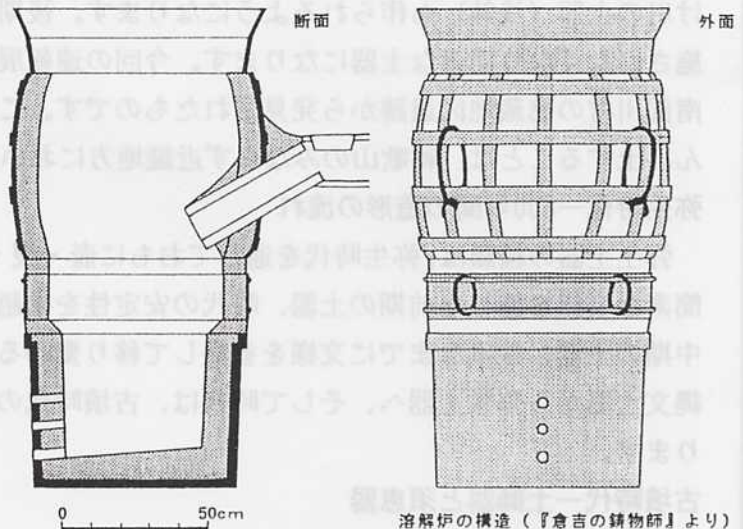
問題になるのは、この溶解炉は元々何処で稼動していたか、何を製造していたかという点です。

転用井戸検出地点から南へ約110mの所で行なった高田土居城の内郭部（県道上富田南部線の拡幅に伴う）の発掘調査でも、同様の炉体破片が鑄造関連の施設と考えられる土坑状の遺構から多数出土しています。また、その周辺の遺構検出面が広い範囲に渡り赤く焼け締まっていたことから、おそらく作業場と考えられる遺構も検出されています。さらにこれより南方300mに所在する大塚遺跡でも炉体の破片が出土しています。これを裏付ける資料としては真継家配下の鑄物師に日高郡南部吉田村高田平九郎の名が見え、このあたり一体に一大鑄造施設が展開していた可能性が十分考えられます。現代でいうところの製鉄コンビナートです。

次に何を製造していたかですが、現時点では鍋の鑄型の小破片を数点確認しているのみで、今後整理が進めばもっと明白になると思われます。

今回の溶解炉（炉体）検出のもつ意味は大きい。このように完全な形で出土したものは極めて稀です。と言うのは、一個体としての操業が終わればゴミ同然であるから打ち砕いて投棄されるか、内側にこびり付いた金属質の回収のため粉々にされたと考えられるからです。従って実際の構造上の詳細な点を検討する上においても良好な資料と言えます。

相州小田原山田家の鉄鍋作り（五十川）



溶解炉の構造（『愈吉の鑄物師』より）



源保重「大砲鑄四」（弘化4年（1847））

溶解炉と送風装置

コラム・考古学の散歩道

日本における土器の移り変わり

— 平成13年度文化財センター速報展の展示解説 —

平成14年2月18日～3月3日にかけて、南部町生涯学習センターで、当文化財センターの第4回巡回展が行われ、多数の見学者でにぎわいました。その折には、縄文時代から江戸時代にいたる土器を時代別に展示して、移り変わりを見ていただきました。各時代における土器の特徴を説明してみたいと思います。

縄文時代—最初の土器

縄文時代は、1万年の長きにわたる遠古の時代です。草創期・早期の土器は、煮炊用の簡素な土器（深鉢）だけです。前期・中期になると、縄文という名前の由来となった縄目の文様を土器の表面につけることが流行します。また、この時期から深鉢のほかに盛り付け用の土器（浅鉢）も作られるようになります。後期の終わりから晩期になると、縄文は施されなくなり簡素な土器になります。今回の速報展で展示した土器は、すべて南部町・南部川村の徳蔵地区遺跡から発見されたものです。このように様々な時期の土器がたくさん出土することは、和歌山のみならず近畿地方においても珍しいことと言えます。

弥生時代—600年間の造形の流れ

弥生土器の種類は、弥生時代を通しておもに壺・甕・高杯・鉢などで構成されています。簡素な文様を施した前期の土器、時代の安定性を物語る様々な形と加飾豊かに表現される中期の土器、執拗なまでに文様を省略して移り変わる後期の土器へと変遷していきます。縄文土器から弥生土器へ、そして時代は、古墳時代の土師器（はじき）の世界へ移り変わります。

古墳時代—土師器と須恵器

古墳時代の土器には、大きく分けて二つの種類の土器があります。一つは、土師器とよばれている弥生土器の流れをくむ軟質の土器です。粘土を成形し、乾燥させて、露天で比較的低い温度で焼成したものです。もう一つは、古墳時代中期の5世紀初頭に朝鮮半島から導入された須恵器（すえき）とよばれる土器です。長石を多く含む耐火度の高い粘土を使い、ろくろや回転台で成形され、窯の中で1000度以上の高温で焼き締められた硬質の土器です。このほかに、朝鮮半島から持ち込まれた軟質の土器を韓式系土器、硬質の土器を陶質土器と呼んでいます。

古代（奈良・平安時代）

奈良時代には、古墳時代と同様に土師器と須恵器がおもに使用されています。ただし、土師器・須恵器の両者に同一の器形および容量のものがあり、容量にはいくつかの規格が存在するようになります。これは、実際の食膳の場において土師器と須恵器の両者どちらも使えるようになったことを示すと考えられています。また、都の土器と和歌山の土器はほとんど同じ形をしています。平安時代になると、須恵器は使用されなくなっていき、代

わりに土師器の表面を煤で燻した黒色土器（こくしょくどき）が使われるようになります。これらのほかに、中国の唐三彩（とうさんさい）を模倣した奈良三彩や緑釉陶器（りよくゆうとうき）、輸入陶磁器などが少量ながら使用されていました。

中世（鎌倉・室町時代）

鎌倉時代になると、土師器～黒色土器の流れをくむ黒色土器よりも高温で燻された瓦器（がき）が主に使用されるようになります。瓦器は、11世紀以降に出現し、西日本で流行した土器で、和歌山では各郡ごとに形や調整の仕方に差があることから、各郡に瓦器を焼く窯が存在したと考えられています。一方、和歌山の南部では、当時東海地方で流行していた須恵器～灰釉陶器の流れをくむ硬質の山茶碗が、瓦器碗の代わりに使用されています。これらの焼き物は、中世後半になると生産が下火になり、碗は漆器に、鍋や釜は鉄製品に、取って代わられたようです。

近世（安土桃山・江戸時代）

近世になると各地で窯業が盛んになり、数多くの土器が生産されます。なかでも九州の有田地方で焼かれた「伊万里焼き」は、我が国最初の岩石を原材料とした磁器という画期的なもので、江戸時代を通して各地に多量に出荷されています。

また、江戸時代の終わり頃に、瀬戸においてもこの技術が習得されて、生産が開始されています（ちなみに「セトモノ」の語源もここからきています）。江戸時代は、ゆたかな商品経済の中で焼き物も庶民層にいたるまで多量かつ全国規模で流通した時代といえましょう。



縄文時代の土器



弥生時代の土器



古墳時代の土器



古代の土器



中世の土器



近世の土器

重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟の修理工事

寺本 就一



■ 主屋の修理前全景



■ 長屋蔵の解体状況

当文化財センターでは、粉河寺大門の他にもう一つ大きな修理現場を担当しています。それは和歌山市に東部にある旧中筋家住宅です。中筋家は、天正13年(1585)豊臣秀吉の根来攻めを逃れてこの地に住んだ文貞坊に始まると伝えられ、正徳2年(1712)に、五代目の良重が名草郡和佐組の大庄屋となり、明治まで六代にわたり大庄屋を務めました。江戸時代末期の嘉永5年(1852)に現在の主屋が建てられ、明治の中頃に現状の屋敷構えが完成しました。建築後150年が経過し、雨漏りによる傷みが目立ってきたので平成13年2月から修理工事を行っています。

現在、土塀と御成門を除くすべての建物に素屋根を架け、長屋蔵は解体をほぼ完了し、その他の建物は屋根の解体を終わりました。解体に伴って、当初の姿や建築技法について調査を行っています。今後、修理の進捗や調査の成果について折を見てご報告します。

お知らせとご案内

和歌山県文化財センターの新体制スタート！

平成14年4月1日付けの人事異動で、当センターの体制は下記となりました。

岩橋驍事務局長のもと、職員一同、和歌山県の文化財保護育成・普及活動に一層の努力をして参りたいと思います。県民の皆様、よろしくお願いいたします。

事務局長 岩橋驍
 事務局次長 松田正昭 篠原隆
 文化財専門員 富加見泰彦
 管理課

課長 西本悦子
 松尾克人 出口由香子 奥出麗子

埋蔵文化財課

課長 渋谷高秀
 土井孝之 村田弘 井石好裕 佐伯和也 黒石哲夫
 藤井幸司 丹野拓 齋藤有美 三浦基行 藤村瑞穂 山野晃司

文化財建造物課

課長 鳴海祥博
 寺本就一 多井忠嗣 鈴木徳子 御船達雄